

まちで見られる虫たち

市街地の生きもの 広瀬重夫

甲虫類（鞘翅目、しょうしもく）のなかま

ハンミョウ、カブトムシ、カミキリムシ、テントウムシなどのなかまは、全動物で最も種類が多く、世界で30万種以上とされ、日本で1万種ほどが記録されているそうです。

甲虫類は、中胸から出る前翅が、厚くてかたい革質（かわしつ）で「上翅（じょうし）」とよび、飛ぶときの原動力となる膜質の後翅は、後胸部からでて「下翅」といい、他の昆虫との大きな違いとなっています。



写真160、ハンミョウ
8月、青谷川公園



写真161、アトワアオゴミムシ
6月、狩口台3

■ハンミョウ

道を歩いていますと、人とある距離をおいて、先へ先へと跳ねていきますので、この虫を「ミチオシエ」とか「ミチシルベ」と呼んでいます（写真160）。

幼虫も成虫も強い大あごでほかの虫を捕らえるハンターです。

この時は、公園の木の葉（マサキ）の上にいました。

その色あいは甲虫のなかの宝石と言えそう。

■アトワアオゴミムシ

上翅のうしろの方に、黄褐色の「」（カンマ）のマークの紋をつけていますので、他のゴミムシのなかまとの区別は容易です（写真161）。ごみ虫はゴミの中だけでなく、石の下、落葉の中、草間、田畑にも住む肉食の昆虫です。得意は早足。



写真 1 6 2、オオヒラタシデムシ
6 月、熊内町 7



写真 1 6 3、タマムシ
6 月、青谷川公園

■ オオヒラタシデムシ

幼虫、成虫ともに動物の死体に集まってきます（写真 1 6 2）。大食家のように、40cmほどのヘビの死肉を15匹ほどのシデムシが数日で皮だけを残して平らげたという記録もあります。

さきのゴミムシ類も、このシデムシのなかまも「自然界の掃除屋さん」として資源を無駄なく土に返してくれる分解者の役目を担っているのです。

■ タマムシ

「生きた宝石」のタマムシが公園をうろついていました（写真 1 6 3）。

幼虫はエノキ、サクラ、カキなどの衰弱木や枯木の材質を食べ、3年ほどかかって成虫になります。

きれいな虹色も見る方向によって変わります。

ついでながら、奈良の法隆寺の「玉虫厨子」（たまむしずし：1960年復元）は国宝のひとつとしてよく知られます。



写真164、ウバタムシ
9月、桜木町3



写真165、アオドウガネ
8月、落合中央公園

■ ウバタムシ

上から見ると、金胴色をしたタムシで、「ウバ」は「老女」を意味し、人生円熟、しぶい上品さがにじみ出ています（写真164）。幼虫は枯れたマツの材で育ちますので、これもやっぱり資源のリサイクルに一役かっているのです。

■ アオドウガネ

コガネムシ、ブイブイなど、コガネムシ科のひとつ。緑色でつやがあります（写真165）。腹の両側に毛の束がとりまいています。公園のネムノキで3匹がひとかたまりとなって葉を食べていました。



写真１６６、コフキコガネ
7月、神仙寺通２

写真１６７、キョウトアオハナムグリ
8月、舞子台２

■コフキコガネ

体は3cm近くある大型のコガネムシで、どんな餌があるのか知れませんが、道路を歩いていました（写真１６６）。体に黄褐色の毛があり、「粉」を吹いたように見えるところから、コフキコガネといいますが、灰白色のものはオオコフキコガネといいます。

■キョウトアオハナムグリ

生垣（いけがき）や庭木のふちなどをつたう、ヤブガラシの花にきていたハナムグリの一種です（写真１６７）。樹液を求めて、チョウやハチのなかまと同じく、木の幹にもやってきます。よく似たのに、シロテンハナムグリがいますが、これは上翅が銅色がかかっています。



写真１６８、コアオハナムグリ
9月、自宅



写真１６９、キンイロジョウカイ
6月、神仙寺通２

■コアオハナムグリ

体長11～16mmの小型のハナムグリです（写真１６８）。庭のシオンの花で、オオハナアブをそばに、どちらも花粉をあさっているようです。

「むぐり」は「もぐり」のなまった言葉で、まさに花の中にもぐっていく感じです。

■キンイロジョウカイ

民家の軒下で見つけた珍しいジョウカイボン（浄海坊）の一種（写真１６９）。前胸背（ぜんきょうはい）の黒い部分のふちが黄金色でとり巻かれています。それよりは上翅の紫色がかりの銅色が目につく、美しいジョウカイボンです。黄褐色をして、体長2cmと少し小さいのは、よく見かけるジョウカイボンです。



写真 170、ニジュウヤホシテントウ
5月、篠原北町4



写真 171、キイロテントウ
6月、熊内町7

■ニジュウヤホシテントウ

テントウムシのなかまは日本で100種類もあり、多くは植物の汁を吸うアブラムシを食べてくれますので、人から見れば益虫です。

しかし、この写真のは、ポットに植えられたジャガイモの葉がめあてのようで、直径8mmの半球形の上翅に28ヶもの黒い小紋をまるで星空のように散りばめています（写真170）。ニジュウヤホシテントウは「テントウムシダマシ」ともいい、ジャガイモをはじめ、ナス、トマト、ホオズキなどのナス科の作物の害虫として農家の人には嫌われます。

■キイロテントウ

駐車場のふちのセイタカアワダチソウの葉上でキイロテントウが交尾中です（写真171）。体はわずか5mmと小さいですが、上翅の黄色と白い前胸背に黒紋が2ヶでとても分かりやすく憶えやすいテントウムシです。なお、「テントウ」は天道と書き、太陽のことを意味します。

みなさんのよく知っている黒地にだいたい色の紋をつけたテントウムシを紋なしから、2、4、12、19まで変異（へんい）に富んでいます。また、ナナホシテントウもよく知られています。



写真 1 7 2、ウスバカミキリ
8 月、青谷川公園



写真 1 7 3、キマダラカミキリ
5 月、自宅

■ ウスバカミキリ

日本には、500種類ほどもあるカミキリムシ科のひとつ。公園のシダレヤナギに体長 5 cm ほどのカミキリが体よりも長い触角をゆっくり動かして止まっていました（写真 1 7 2）。

夜、見に行くと、幹にあいた穴から外の様子を伺っているのもいました。

■ キマダラカミキリ

正午すぎに、外出しようと玄関を出て振り向いたとき、塀に止まっているカミキリが目に入りました（写真 1 7 3）。

体長 3 cm よりも長い触角のべっこう色したカミキリは、ちょっとした骨董品（こっとうひん）の感じがします。

幼虫は、多くの落葉樹の枯木で育つとあります。



写真 174、ヨツスジトラカミキリ
9月、熊内町7



写真 175、ゴマダラカミキリ
7月、六甲アイランド

■ヨツスジトラカミキリ

駐車場のふちの草むらに、イタドリの雄株（お花だけの草本）があり、花を好むとされる「トラもよう」のカミキリが来ていました（写真174）。この花には、他にキンバエ、ヒメヒラタアブもやってきて、花粉にありついているようでした。そして、それらを狙ってフタモンアシナガバチも飛びまわっています。どんな植物でも、たくさんの生き物を養い、それらとかかわって生きているのです。

■ゴマダラカミキリ

人工島の海上都市の公園に植えられたスズカケノキ（プラタナス）に見ごたえのあるゴマダラが止まっていました（写真175）。

この幼虫は弱りかけた樹木の中にくいこんで、数年をかけて成虫になります。

幼虫は乳白色、円筒形をしてテッポウムシともいわれます。

まき割などする機会がありましたら、中から出てくる幼虫などを材部ごと採取して飼ってみましょう。ゴマダラのほか、いろんな昆虫がかえってくることでしょう。



写真 176、オジロアシナガゾウムシ
8月、舞子台6



写真 177、ハイイロゲンゴロウ
7月、ポートアイランド

■ オジロアシナガゾウムシ

ゾウムシのなかまは名のとおり、前頭部がゾウの鼻のように長く突き出たところからついた名前で、世界ではなんと4万種も知られる大きなグループです。

写真のオジロは川ぶちの空き地に生えるクズの葉にいたもの（写真176）。1cmほどの黒い体に白い毛が生え、丸まった体とあいまって、まるで小さなパンダを見ているようです。

■ ハイイロゲンゴロウ

アメンボなども飛んでくる南公園の池に1cmほどのゲンゴロウが数匹いました（写真177）。

水生昆虫のゲンゴロウは、アクアラング式の呼吸で、はねの下にためこんだ酸素を使い果たすと、水面に昇ってきて腹部に空気の泡をくっつけてまたもぐるといった動作を繰り返します。また夜、灯火にも飛んできます。これらのことは、今、水の生活をしている昆虫が、もとは陸上生活をしていたことを物語るものです。さらにその前に水中（海）で生活していたのですから、太古の昔にもどったようです。

■ ユミアシオオゴミムシダマシ

夜の公園で、シダレヤナギに来ていた5匹のうちの1匹です（写真178）。足の中ほどが弓型になっているので、こんな名前がつけました。

ほかに、このヤナギの樹幹や根元にはウスバカミキリやクロゴキがいます。どれも夜行性の虫たちです。

この樹皮の青灰色の部分は地衣類（ちいるい）のレブラゴケの一種です。これを食べている・・・？



写真178、ユミアシオオゴミムシダマシ
7月、青谷川公園

[このページのPDFファイル](#)



[トップページへもどる](#)